

壁画

15

2026.2.1
執筆発行／池田康

タイピスト

盲目のタイピストが

打つ

人類史

光速にまがう高速

きわめて優秀な長い指の長い爪

紅のマニキュアの哄笑

苦々しい譜面めぐり

打ち終わった原稿を集め

どの順番か訊くと

適当に並べると言う

幾万とあるタイプライターのキーの

中央部分だけを使って打つ

人類史は

正しいはずがない

が従うべし

長い爪の紅の威に人類は跪く

譜面めぐりはため息をつき

新しい紙を差し込み

タイピストの口にウォッカのストローを当てがい

煙草を啜えさせ

コッペパンを食べさせ

爪にマニキュアを塗る

降りてくる言葉を追い

指は休みなく動く

時には気まぐれはるか彼方のキーまで遠征し

壊れたキーは捨て置き

硬いキーは避け

ミスタッチも気にせず

たかが人類史

少々間違えたってなんてことはない

いよいよ破綻したらゴミ箱に放り込めばいい

譜面めぐりは樂觀しているが

タイピストが何を考えているかはわからない

足元では猫があくびをする

人類史をバカにする猫

真つ白な毛と碧眼を持った王族の獣

時々タイピストの膝に乗り

譜面めぐりの手を引つ搔く

人類史に大災厄が記され

百万人が死ぬ

三百万人が家を失う

五百万人が家族を失う

マドラーの仕業だ 譜面めぐりは苦々しく思う

つくづく軽蔑すべき野郎だ

コーヒーやカクテルをかき混ぜる

こんな簡単な仕事はない

世の中で最も楽な職業であり 軽薄なやつだ

なんでもかんでもかき混ぜて

こんな大惨事をしでかす

譜面めぐりはマドラーを蹴飛ばすが

こちらは平気のへいぞ

タイピストのポケットに潜り込み

タイピストは期待と恐怖

こいつは私の仕事をかき混ぜぶち壊してしまおうだろう

タイピストの頭蓋骨内部を頭痛が駆け回る

あちからこちらへと痛みは場所を変え 光彩を変え

顔をしかめ 痛みに手を当て 髪を掻きむしる

痛みが目に来れば 見えない目が疼く

刺激された見えない目が何かを見る

煌びやかな色彩紋様

意味ありげな形たち その配置と構図

頭痛は最高潮に達し

タイピストはキーボードを打ち続ける

指の遊びが選ぶ大統領は

貧乏くじでなければ狂暴くじ

泥棒くじの上に絶望くじ

世界震度の淵あまねく深く

譜面めぐりは頭痛というものがわからない

頭を持つていないのかもしれない

そんな譜面めぐりの頭にも

恐怖の稲妻が走る時がある

五年に一度 十年に一度

極度の興奮のあまり

タイピストが椅子から崩れ落ちる時だ

タイピストは男？

マドラーは男だと考える

猫も男だと考える

タイピストは女？

譜面めぐりは女だと考える

タイピスト自身も女だと考える

タイピストは男にも女にもなれる

なんにでもなれる

タイピストは独裁者を想像する

独裁者が食べるところ

笑うところ

怒るところ

隣国侵略の命令を下すところ

冷血な参謀と密議するところ

大進撃の大笑いと

敵国死者が十万を超えた満足感

タイピストはイメージし なりきる

イメージに取り憑かれる

無礼を働いた者に対して死刑を宣告し

陰で悪口を言う者らの禁錮を指示し

国中に自分の肖像を配布し

独裁者タイピストの神経は張り詰める

心の増長の歯止めが効かず

のべつまくなしに怒鳴り散らす

猫を蹴り付け

マドラーをへし折り

タイプライターを殲滅し

譜面めぐりがバケツの水をぶっかけると

タイピストはやつとタイピストに戻る

マドラーが世界をかき混ぜると

白と黒とが混ざってしまう

譜面めぐりは懸命に白と黒とを分けようとするが

すべて闇の中 濁った泥の中

余計なことはするな

お前はマニスクリプトを揃えればいい

タイピストは命ずる

譜面めぐりが口答えると

タイピストはマドラーをポケットに入れ旅に出る

猫もついていく

人類史を散歩

盲目だからどこを歩いているのかわからない

マドラーも案内できない

譜面めぐりは留守番だ

ロボットがやってきて座る

譜面めぐりは抗議するがロボットは仕事を始める

一分の隙もない完璧な仕事ぶり

世話することがないので譜面めぐりはそばで見ているだけだ

タイピストはネイルアートに夢中

自分では見えないのに青の上に月と星を置いて
神話と遊ぶ

猫の爪もネイルアート

マドラーの足もネイルアート

世界に退屈してネイルアート

しかし人類史の杜撰さにロボットの完璧が狂う

狂い始めたらくまでも狂う

ロボットは仕事をやめて踊り始める

譜面めぐりがマニスクリプトを集めて焚き火をしていると

タイピストが帰ってきた

その爪はいよいよ長く

ネイルアートは目がくらむほど豪華

タイピストは見る

猫の目を通して

猫の欲望で

マドラーの虚無で

タイピストは世界を見る

